

2017年度

九州保健福祉大学

大学院学生募集要項

医療薬学研究科

医療薬学専攻 博士課程(4年制)

学校法人 順正学園

九州保健福祉大学 入試広報室

〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1
フリーダイヤル (0120)24-2447
T E L (0982)23-5544 (直通)
F A X (0982)23-5540
E-mail:kouhou@phoenix.ac.jp

目 次

医療薬学研究科 医療薬学専攻 博士課程

I 募集要項

1. 募集課程・募集定員及び修業年限	1
2. 出願資格	1
3. 募集日程	1
4. 選考方法	1
5. 試験会場	1
6. 出願書類等	2
7. 出願方法及び出願先	2
8. 合格発表及び入学手続	2
9. 学費（2017年度入学生）	2

II 博士課程の概要

教育目的・教育課程	3
カリキュラム表・修了要件	5
履修指導及び研究指導の方法	6
4年間の流れ・特別研究 研究指導教員の研究領域	7
志願票記入例	11
九州保健福祉大学案内図	巻末

医療薬学研究科 医療薬学専攻 博士課程

I 募集要項

1. 募集課程・募集定員及び修業年限

研究科	専攻	課程	募集定員	修業年限
医療薬学研究科	医療薬学専攻	博士課程	4名	4年

2. 出願資格

次のいずれかに該当する者

- ① 新6年制課程の薬学科を卒業または平成28年3月卒業見込みの者。
- ② 旧4年制課程の薬学科を卒業し、薬剤師の資格を有する者で修士課程を修了した者。
- ③ 旧4年制課程の薬学科を卒業後、薬剤師として3年以上経験した者で、本学で修士卒と同等の学力があると認められた者。
- ④ 外国において学校教育における18年の課程（最終の課程は、医学、歯学、薬学または獣医学）を修了した者。
- ⑤ 医師、歯科医師又は獣医師の資格を有する者。

3. 募集日程

区分	願書受付期間	入試日	合格発表日	入学手続締切日
I期	平成28年11月18日(金))) 平成28年12月2日(金)	平成28年12月11日(日)	平成28年12月19日(月)	一次：平成29年1月20日(金) 一次：平成29年2月21日(火)
II期	平成29年1月16日(月))) 平成29年2月1日(水)	平成29年2月12日(日)	平成29年2月20日(月)	平成29年3月21日(火)
III期	平成29年2月6日(月))) 平成29年2月22日(水)	平成29年3月5日(日)	平成29年3月13日(月)	平成29年3月30日(木)

※願書は消印有効。

ただし、出願資格に疑義のある者は、受験できないことがあるので早めに相談すること。

※入学手続きは締切日必着。

4. 選考方法

書類審査（小論文）・面接により総合して選考。

時間	内容
9:15	集合
9:20～9:30	受験上の注意、受験者の確認
9:30～11:00	基礎学力試験 ※
11:10～	面接（専攻分野、研究分野について）

※有機化学、生薬学、分析化学、衛生化学、生化学、薬理学、薬物治療学の第96～101回薬剤師国家試験の改変問題により2科目選択

5. 試験会場

九州保健福祉大学

(宮崎県延岡市吉野町1714-1)

※詳しくは巻末の大学案内図を参照。

6. 出願書類等

- 本学所定用紙
 - ①入学志願票・受験票
 - ②小論文
 - ③研究業績
 - ④通知用宛名カード
 - ⑤検定料 30,000円（銀行振込）
- 証明書
 - ①成績証明書（厳封したもの）
 - ②出身大学が発行した卒業証明書又は卒業見込証明書
 - ③国家資格免許証（写し）

7. 出願方法及び出願先

- ①出願方法
上記書類一式を「速達書留」で郵送するか、持参して下さい。出願書類受付完了後、受験票を送付します。
※身体的理由により、受験または就学にあたり特別な配慮が必要となる場合は、出願前に入試広報室へ相談して下さい。
- ②出願先
〒700-0022 岡山県岡山市北区岩田町2-5 学校法人順正学園 入試センター内
九州保健福祉大学 入試広報室

8. 合格発表及び入学手続

- ①合格発表
入試結果については、合格・不合格にかかわらず、本人宛に郵送で通知します。
学内における合格者の掲示は行いません。なお、電話等による合否の問い合わせは受け付けません。
- ②入学手続
合格者には、「入学手続の手引」を送付しますので、それをよく読んで指定の期日までに手続きを完了して下さい。期日までに完了されない場合は、入学辞退として取り扱います。
- ③提出書類
 - a. 誓約書（本学所定用紙）
 - b. 写真（1枚）
 - c. 卒業証明書（出願時に見込証明書提出者のみ）
 - d. その他、本学が指示する書類
- ④学費納入
本学所定の振込用紙で、期日までに指定銀行に納入して下さい。
※合格者に送付する「入学手続の手引」をよく確認して下さい。
- ⑤入学辞退
都合により本学への入学を辞退する場合には、書面により必ず入試広報室へ届け出て下さい。

9. 学 費（2017年入学生）

- 医療薬学研究科 博士課程

費 用	前 期	後 期	合 計	入学金（初年度のみ）	150,000円
授 業 料	490,000円	490,000円	980,000円	※本学園設置校からの進学者は入学金を免除します。	
合 計	490,000円	490,000円	980,000円		

II 博士課程の概要

【教育目的】

本学大学院医療薬学研究科医療薬学専攻では、「医薬品の品質、安全性、有効性を十分な科学的根拠に基づき、予測、評価、判断できる機能を有し、これらの能力を総合的に活用することで、薬剤師として最善の職責を果たすことができ、臨床現場において指導的立場に立てる薬剤師を養成する」ことが教育目的である。

【教育課程】

1) 科目履修：

本研究科では、レギュラトリーサイエンスの概念に基づき、医療品の品質、安全性、有効性を十分な科学的根拠により、予測、評価、判断でき、これらの能力を総合的に活用する能力を涵養する。本研究科院生の将来の進路として、(1)病院薬局勤務希望、(2)調剤薬局勤務希望、(3)病院薬局または調剤薬局勤務を想定しているが、まだ特定していない、(4)基礎系大学教員や創薬研究者希望等の4つのパターンを想定している。従って、研究指導教員は、入学時に院生の将来の進路について面談をおこない、必修6科目に加えて推奨履修モデルを提示し選択科目を決定する。

具体的には、1年次に「医療倫理学特論」と「薬学研究方法特論」2科目（4単位）を必修とし、ここでは、薬剤師としての臨床の場における倫理問題を自己解決できる倫理思考を習得させ、さらに、薬学における研究方法に関する多角的な知識を習得することで臨床現場において発生した問題への対処能力を涵養する。

そして、医薬品の品質、安全性、有効性について科学的根拠に基づき予測、評価、判断できる能力を涵養する科目として、①品質、②安全性、③有効性の3群に分類し、各群に主要科目4科目、合計12科目を、さらに、各群におけるそれらの能力の総合的活用を目指す科目として「医療薬学基礎演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の3科目を配している。具体的には、「①品質」科目群では、「医療分子機能化学特論」、「東洋医薬学特論」、「臨床分析化学特論」、「応用薬剤学特論」を、「②安全性」科目群では、「免疫化学療法学特論」、「薬品作用学特論Ⅰ・Ⅱ」、「医療公衆衛生薬学特論」を、「③有効性」科目群では、「臨床薬学特論Ⅰ・Ⅱ」、「フィジカルアセスメント特論」、「感染症治療薬学特論」を、専門選択科目として合計12科目（24単位）を編成し、その中から9科目（18単位）以上修得し、また、「①品質」科目群には「医療薬学基礎演習Ⅰ」を、「②安全性」科目群には「医療薬学基礎演習Ⅱ」を、「③有効性」科目群には「医療薬学基礎演習Ⅲ」を必修科目として合計3科目（6単位）を編成し、最終年次の4年次には、安全で効果的な薬物療法を提案できるよう「医療薬学総合演習」1科目（2単位）を必修科目として配している。

2) 特別研究：

特別研究における論文作成で培われる論理的思考能力は、これらの総合的活用能力を飛躍的に増幅させることで薬剤師として最善の職責を果たすことができ、臨床現場において指導的立場に立てる薬剤師の養成に極めて重要である。従って、博士論文の主題は、研究指導教員の指導の下、院生が将来の進路に捉われることなく純粋な学術的興味に従い、さらに医薬品の品質、安全性、有効性の独立した3群の区分に捉われることなく、研究指導教員が取り組んできたこれまでの研究テーマを参考にして討議を重ね決定する。即ち、特別研究の目的は、社会貢献できるより質の高い論文を作成することであり、その過程の中で院生が高度な論理的思考能力を身につけることにある。

3) 高度臨床能力の涵養

本学は全国の薬学部に先駆け、「バイタルサインが読める薬剤師・フィジカルアセスメントが実施できる薬剤師教育」に積極的に取り組み、薬剤師の機能拡大に取り組んで来た。この取り組みは、全国の薬学教育の模範となるべく文部科学省の教育支援プログラム「医療人GP」に採択されており、高く評価されている。現在、模擬ベッドサイド実習室には、多くの患者ロボットを整備しており、ロボットはコンピュータ制御で種々の疾患を持つ患者の病態をバイタルサインとして出力が可能となっている。すでに大学院教育においてこれらを活用するために、多くの主要典型症例をシミュレーションできるプログラムを開発している。これからの薬剤師には、医師に対し調剤や医薬品の情報提供のみに留まらず、薬剤師自身が患者の身体情報を直接把握し、医師がより適切な処方設計を行えるよう支援していく能力が求められる。本研究科では、高度臨床能力を涵養する薬剤師教育において、本学の模擬病院薬局、模擬調剤薬局と模擬ベッドサイド実習室での患者ロボットを組み合わせた演習プログラムを使用する。さらに学外の薬局や病院薬局での医療現場における演習は、総合的な能力拡大に不可欠と考えられるため、1年次から4年次を通じて、院生は本学連携薬局や病院薬局での少なくとも週1日の医療現場体験を推奨する。

【九州保健福祉大学大学院 医療薬学研究科 医療薬学専攻 カリキュラムの構成図】



【カリキュラム表】

○医療薬学研究科 医療薬学専攻 博士課程

科目区分	授業科目	年次	必修	選択
専攻 科目 目群 医療 薬学	医療倫理学特論	1	2	
	薬学研究方法特論	1	2	
	医療薬学総合演習	4	2	
	(特別研究)	1～4	0	
品 質	医療分子機能化学特論	1・2・3		2
	東洋医薬学特論	1・2・3		2
	臨床分析化学特論	1・2・3		2
	応用薬剤学特論	1・2・3		2
	医療薬学基礎演習Ⅰ	1・2・3	2	
安 全 性	免疫化学療法学特論	1・2・3		2
	薬品作用学特論Ⅰ	1・2・3		2
	薬品作用学特論Ⅱ	1・2・3		2
	医療公衆衛生薬学特論	1・2・3		2
	医療薬学基礎演習Ⅱ	2・3	2	
有 効 性	臨床薬学特論Ⅰ	1・2・3		2
	臨床薬学特論Ⅱ	1・2・3		2
	フィジカルアセスメント特論	1・2・3		2
	感染症治療薬学特論	1・2・3		2
	医療薬学基礎演習Ⅲ	2・3	2	

【修了要件】

本研究科課程の修了要件としては、4年間の学修期間をもって30単位の単位修得を満たし、かつ博士論文審査及び最終試験に合格することとする。

学位審査の厳格性及び透明性を保つために、博士論文審査請求は、本研究科が認定する権威ある学術雑誌に論文掲載許可が得られた後とし、当該論文について主査ならびに副査により予備審査を実施、予備審査合格後に博士研究成果発表会を公開で開催し、研究科委員会による本審査では、研究の新規性、プレゼンテーション能力、論理的思考能力等を総合的に判断することにより、出席者の3分の2以上の賛成で合格とする。さらに、化学領域の英語能力の確認のために実施する最終試験の合格を義務付ける。

なお、博士論文の公表については当該博士論文が本研究科認定の権威である学術雑誌に掲載されること、さらにその別冊を本学図書館に所蔵し、閲覧希望者はいつでも見ることができるものとする。

本研究科が認定する「権威ある学術雑誌」とは、インパクトファクター（IF）を持つ国際英語学術雑誌を基準とする。但し、地域医療に関する研究論文等は、IFを持つ国際英語学術雑誌への掲載が困難であることが想定される。そこで、本研究科委員会では、博士論文の質の確保のために、博士論文を掲載したい学術雑誌がIFを持たない場合、その雑誌が博士論文掲載雑誌として相応しいかどうか別途認定を行う。但し、掲載学術雑誌は、厳密な査読制度を有するものとする。従って、IFを持たない学術雑誌に博士論文を投稿する場合は、投稿前に研究科委員会に博士論文掲載雑誌の認定を申請しなければならない。これらの博士論文掲載雑誌の認定は、定期的に見直しを実施する。また、博士論文については、第1著者であることが求められる。

【履修指導及び研究指導の方法】

〈履修指導〉

本研究科院生の将来の進路として、(1)病院薬局勤務希望、(2)調剤薬局勤務希望、(3)病院薬局または調剤薬局勤務を想定しているが、まだ特定していない、(4)基礎系大学教員や創薬研究者希望等の4つのパターンを想定している。従って、研究指導教員は、入学時に院生の将来の進路について調査をおこない、必修6科目に加えて選択科目の推奨履修モデルを提示する。

(1) 病院薬局勤務希望者については、高度医療をサポートするための薬物構造活性相関の知識の必要性、また近年病院薬局の多くでTDMをはじめとする分析機器の導入が進んでいることからそれらの活用を想定して、「①品質」科目群から「医療分子機能化学特論」、「臨床分析化学特論」の2科目の選択を推奨し、さらにこの群におけるそれらの能力の総合的活用を目指す必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅰ」を修得する。また、「②安全性」科目群からは、臨床での薬物療法の基礎となる「薬品作用学特論Ⅰ・Ⅱ」に加えて、高度医療に不可欠な「免疫化学療法学特論」の3科目の選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅱ」を修得する。「③有効性」科目群では、医療現場で必須と考えられる「臨床薬学特論Ⅰ」に加えて「臨床薬学特論Ⅱ」、薬剤師ベッドサイド業務に対応するための「フィジカルアセスメント特論」や「感染症治療薬学特論」の4科目全ての選択を履修し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅲ」を修得する。

(2) 調剤薬局勤務希望者については、地域医療におけるコミュニティー薬局業務が不可欠であることから、「①品質」科目群では、漢方薬のOTCに関わる「東洋医薬学特論」、「応用薬剤学特論」の2科目の選択を推奨し、さらに、この群におけるそれらの能力の総合的活用を目指す必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅰ」を修得する。また、「②安全性」科目群では、臨床での薬物療法の基礎となる「薬品作用学特論Ⅰ・Ⅱ」に加えて地域予防薬学の観点から「医療公衆衛生薬学特論」の3科目の選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅱ」を修得する。「③有効性」科目群では、医療現場で必須と考えられる「臨床薬学特論Ⅰ」に加えて「臨床薬学特論Ⅱ」、在宅医療に対応するための「フィジカルアセスメント特論」や「感染症治療薬学特論」の4科目全ての選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅲ」を修得する。

(3) 病院薬局または調剤薬局勤務希望しているが、まだ特定していない者については、将来どちらの勤務に就いても対応できるよう履修指導をおこないたい。そこで、「①品質」科目群から、「医療分子機能化学特論」、「臨床分析化学特論」、「応用薬剤学特論」の3科目の選択を推奨し、さらに、この群におけるそれらの能力の総合的活用を目指す必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅰ」を修得する。また、「②安全性」科目群では、臨床での薬物療法の基礎となる「薬品作用学特論Ⅰ・Ⅱ」に加えて高度医療に不可欠な「免疫化学療法学特論」の3科目の選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅱ」を修得する。「③有効性」科目群では、医療現場で必須と考えられる「臨床薬学特論Ⅰ」のみとし、薬剤師ベッドサイド業務・在宅医療に対応するための「フィジカルアセスメント特論」や「感染症治療薬学特論」の3科目の選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅲ」を修得する。

(4) 基礎系大学教員や創薬研究者希望者については、品質および安全性管理が重要であることから、「①品質」科目群から、「医療分子機能化学特論」、「臨床分析化学特論」、「東洋医薬学特論」、「応用薬剤学特論」の4科目全ての選択を推奨し、さらに、この群におけるそれらの能力の総合的活用を目指す必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅰ」を修得する。「②安全性」科目群では、臨床での薬物療法の基礎となる「薬品作用学特論Ⅰ・Ⅱ」、「免疫化学療法学特論」「医療公衆衛生薬学特論」の4科目全ての選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅱ」を修得する。「③有効性」科目群では、薬剤師ベッドサイド業務・在宅医療に対応するための本学独自の「フィジカルアセスメント特論」のみ1科目の選択を推奨し、さらに必修演習科目「医療薬学基礎演習Ⅲ」を修得する。

〈研究指導〉

博士論文の主題は、研究指導教員の指導の下、院生が将来の進路に捉われることなく純粋な学術的興味に従い、研究指導教員が取り組んできたこれまでの研究テーマを参考にして討議を重ね、さらに、医薬品の品質、安全性、有効性の独立した3群の区分に捉われることなく決定する。研究指導では、博士論文が社会により大きく貢献できることを目標に、可能な限り高いレベルの学術論文作成を目指す。

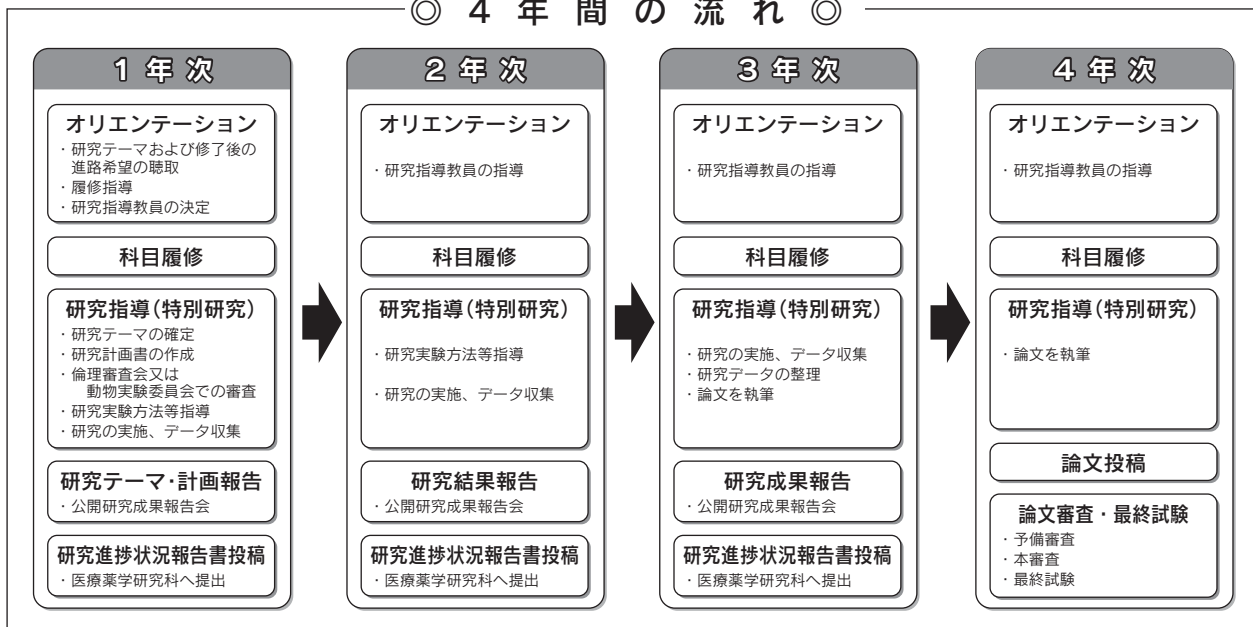
科目名：(特別研究)単位数：0

授業の概要・一般目標 (GIO)

臨床現場において指導的立場に立てる薬剤師には、医薬品の品質、安全性、有効性を含めた様々な業務上の専門性の高い問題に対処するために、問題点を抽出し検討課題を設定する能力、課題遂行の手法を選択し実施する能力、検討結果を客観的に評価し総括する能力、さらに、成果を公表し社会に還元する能力が求められる。博士論文の作成は、それらの能力を培い本研究科が目指す有能な指導的立場に立てる薬剤師養成に不可欠なものである。さらに、特別研究で作成する博士論文は、それ自体、社会への貢献において学術的に十分な新規性が求められる。そこで特別研究では、院生が将来の進路に捉われることなく、純

粹な学術的興味に従い、各研究指導教員が取り組んできたこれまでの研究テーマを参考に討議を重ね、研究指導教員を決定する。博士論文の主題は、研究指導教員の指導の下、医療品の品質、安全性、有効性の3群の枠に捉われることなく決定することとし、高いレベルの学術論文を作成することを目標とする。

◎ 4年間の流れ ◎



特別研究 研究指導教員の研究領域

1 教授 前田 和彦

これまで脳死からの臓器移植、安楽死、尊厳死、医療過誤等において、临床上の医療従事者の倫理観と法的責任について研究を進めてきた。近年は、従来の研究に加えて、医療従事者（薬剤師を中心として）の資格法上の業務範囲と実際の医療現場での業務範囲との適合を現場のリサーチ等から比較検討し、医療従事者に必要な倫理観と対応する法制度の再構築を図るべく研究を進めている。薬剤師等の医薬品使用の安全性等は、対応する専門職の臨床に特化した倫理観とそれを支える法制度の適切な相関関係の中にあるべきとすることを導き出すのが研究の主眼である。

2 教授 佐藤 圭創

これまで、新規酸化ストレスマーカーの研究として、新規フリーラジカル捕捉剤を用いた電子スピン共鳴有機溶媒抽出法（特許出願番号2008-57368）を開発してきた。さらに、この方法論を用いて、急性肺障害、緑膿菌肺炎、炎症性腸炎などの各種疾患動物モデルでの酸化ストレス病態の解析、ヒトインフルエンザ症例での酸化ストレス状態の解析を行っている。これらの最先端の研究には、酸化ストレス関連の手技だけでなく、大学院生として必要な、細胞培養、免疫組織化学染色、ウエスタンブロット、PCRなど分子生物学的手法を学び、さらには、研究結果をもとに試行錯誤することで問題解決能力の育成を目指している。

3 教授 比佐 博彰

これまで神経・体液性腎臓機能調節機構および副腎カテコールアミン放出機構の解析を進めてきた。近年は、虚血再灌流による臓器障害の発現機序と治療薬の探索に加え、ヒト心臓バイパス手術におけるバイパス血管のセロトニン誘発収縮を増強するリスクファクターの解明を進めている。研究方法として、血管収縮反応測定のためのマグヌス法、組織免疫染色、ウエスタンブロット、ノザンブロット、PCRなど分子生物学的手法を用いている。

4 教授 和田 光弘

医薬品のみならず乱用薬物、環境汚染物質および食品成分などの「健康影響物質」を対象にHPLCを標準基盤とし、これに適用可能な蛍光および化学発光検出法を駆使し、「高感度分析法の開発」を行ってきた。さらにこれらのオリジナリティーの高い分析法を用いて、ヒトあるいは実験動物由来の生体試料を用いた品質評価、健康への影響評価への展開を行い、その「実用性を証明する」。得られたデータを科学的エビデンスとして社会に積極的に発信する。

5

教授 山崎 哲郎

これまで生理活性化合物の探索を目的として、尿素誘導体やエンヒドラジンを出発原料とした窒素原子、酸素原子、イオウ原子等を含む4～7員環の新規複素環化合物の合成および合成法の開発研究を進めるとともにペプチド合成に必要な脱水縮合剤の合成研究を行ってきた。近年では、遺伝子をターゲットとした新たな機能性核酸誘導体のモノマー、オリゴマーの合成研究ならびに生理活性を有する新規ジペプチド誘導体の合成研究を進めている。

6

教授 垣内 信子

これまで漢方薬の原植物のDNA分析、系統解析、薬用資源の研究を進めてきた。近年は、主要な生薬であり日本に分布していない「マオウ」の原植物であるEphedra属植物について、国内外の研究者と連携し研究を行い、ユーラシア大陸東域（東アジア、南アジア）から中央アジア、西アジア、地中海にかけてのシナマオウ関連のEphedra属植物の近縁関係、生薬としての評価に成果を挙げている。さらに国産生薬資源にも注目し、日本産原料で需要のほとんどまかなっている生薬「モクツウ」の原植物であるAkebia属植物について日本各地の野生植物を調査し、各産地の特徴を明らかにしている。

7

教授 渡辺 渡

これまでウイルス学を基盤として、抗ウイルス薬創製のためのスクリーニング系の開発やそれを利用した抗ウイルス活性物質の発見ならびに作用機序の解析研究を行ってきた。これらの一連の研究では、米国で臨床試験第Ⅲ相に進んでいる抗HIV薬も見出している。近年、ウイルス学の新たな応用として、ウイルス感染モデルを利用した環境化学物質の免疫系への影響研究を進めている。これらの研究を推進するにあたって、マウスや培養細胞を用いたウイルス感染実験やマイクロアレイ、RT-PCR、クローニングなど分子生物学的手法、さらにはELISAやウェスタンブロットティングなど様々な生化学的手法を利用している。

8

教授 本屋 敏郎

これまで主に医薬品適正使用支援のための臨床薬学研究を行ってきた。具体的には動物あるいは人における薬物相互作用に関する研究、薬物血中濃度モニタリング（Therapeutic Drug Monitoring : TDM）に関する研究、その他薬物体内動態に関する研究、臨床の場における服薬指導事項の科学的根拠構築に関する研究、ハード面での医薬品適正使用支援システム構築に関する研究などを行い、さらに、医薬品適正使用支援システムとして近年二次元コードお薬手帳鑑査システムの開発を手がけている。

9

教授 高村 徳人

これまで血清中のヒト血清アルブミン（HSA）およびα1-糖蛋白質（AGP）の薬物結合サイトの結合能と薬物生体内分布の関連やサイトの微環境変化およびHSAの抗酸化能についての研究を進めてきた。近年は、HSAおよびAGPの結合サイトの経時的な結合変化を患者血清から直接測定するための手法を開発し、その結果に基づき鎮痛薬の効果的な投与方法の臨床応用を可能としている。さらに病態評価のためのフィジカルアセスメントの手法も取り入れている。これらの経験をもとに、HASやAGPの解析法および臨床応用についても修得する。研究手法としては、HPLCや円二色による分析法および蛍光プローブ法やUV吸収差スペクトル法などを用いている。

10

教授 山本 隆一

これまで電位依存性Naイオンチャネルやインスリン受容体の細胞膜発現調節機構、また血管平滑筋や瞳孔平滑筋緊張を調節する細胞内シグナル伝達経路の研究を進めてきた。近年は、心臓バイパス手術におけるヒトバイパス血管のセロトニン誘発れん縮を増強するリスクファクターの解明を進めている。研究方法として、血管収縮反応測定のためのマグヌス法、組織免疫染色、ウェスタンブロット、ノザンブロット、PCRなど分子生物学手法を用いている。

11

教授 松野 康二

これまで“健康と環境との係わり”に関する研究を進めてきた。主な研究領域は、毒性学、公衆衛生学、環境科学、産業衛生学であり、薬毒物および有害化学物質の安全性評価、体内動態解析、遺伝子多型（個人差）による安全性評価および生体影響（作用機序）の解明に取り組んできた。また、近年は、化学物質の安全性評価のためのバイオマーカーの検索および農産物中の生理活性成分の検索も進めている。研究を通して、薬毒物の安全性評価のための手技・手法も修得する。研究手法としては、種々の機器分析技術を用いている。

12

教授 黒川 昌彦

これまで伝統医薬物やサプリメント等から新規抗ウイルス薬の開発やウイルス感染病態および宿主感染免疫防御機序の解析に関する研究とともに、遺伝子治療への応用に向けたウイルスベクターの基礎研究を進展させてきた。近年は、これらの研究に加えQOLの維持・増進に貢献できる研究として、ウイルス感染動物を用いて、胎児期・新生児期環境化学物質暴露やメタボリックシンドロームによる感染症増悪化現象の立証とその解析研究を進めている。研究方法として、種々のウイルス感染動物や培養細胞を用いて、病態解析を基盤としてウイルス学的、免疫学的、生化学的、分子生物学的な種々の手法を用いて、感染病態変化を遺伝子レベルで解析している。

13

教授 横山 祥子

これまでにプロスタグランジンなど不安定な薬物の分解反応を速度論的に解析し、生体内界面活性物質を使った安定化を報告した他、新規抗腫瘍活性化化合物OSW-1の標的指向化を目的とした表面修飾リポソームを用いたDDS研究を行ってきた。最近では、原子間力顕微鏡法(AFM)の手法を用いて、生体膜表面でのシグナル伝達や細胞認識などの生体界面現象を解明するとともに、生体膜と薬物の相互作用というテーマで薬物の分布状態、選択的集積性の有無、薬物活性、副作用などを目で見える画像として捉えることにも取り組んでいる。

14

教授 白崎 哲哉

これまで、電気生理学、Ca²⁺イメージング、行動科学的手法などを用いて、中枢・末梢神経の生理機能と薬毒物の作用機序について解明して来た。最近では、非接触性の最新行動科学解析技術も取り入れて、環境要因の中枢神経機能に対する影響の解明と予防薬学への応用を目指している。また、ヒトでの疾病予防・健康増進効果も研究予定である。

15

教授 永井 勝幸

これまでシクロデキストリン、オリゴヌクレオチド並びに多糖類を用いて機能性分子設計に関する研究を行ってきた。これらの機能性分子を設計する上で重要な因子であるターゲット分子(細胞)への高選択的結合とターゲット分子(細胞)の分解能を高める機能を併せ持つことにより、より効率的にターゲット分子(細胞)を人工的に抑制することを見いだした。近年は、癌細胞特異的に増殖することが出来るよう遺伝子改変したアデノウイルスをデザインし、治療や診断に応用する研究を進めている。また、機能性分子設計の考え方に基いて現在開発中の医薬品候補化合物の大量製造方法へ応用することができ、現在世界各国で後期第Ⅱ相臨床試験を実施中である。この機能性分子設計の手法を用いることにより効率的な創薬に繋げることを目指している。

16

教授 鈴木 彰人

これまで、薬物血中濃度解析および副作用モニタリングの手法を用いて、処方設計支援を中心とした医薬品適正使用に関する研究を行ってきた。近年は、日本を含めた主要諸国において、チーム医療で行う臨床栄養管理が重要視されるようになったことから、薬物療法のみならず栄養療法にまで視点を広げ、脳血管障害回復期における適正な臨床栄養評価の実施に関する研究を手がけてきた。現在はさらに、侵襲期、特に外科手術時の栄養管理について、新たな栄養指標として酸化ストレスマーカーを取り入れることを試み、生化学的手法を用いて栄養療法における個別化治療に貢献できることを目指している。

17

教授 程 炳 鈞

これまで漢方基礎理論の研究と漢方生薬の臨床効果の解明に関する研究を進めてきた。漢方医学の本来の持つ奥意を解明するため、日中両国の研究者と臨床医たちは常に新しい発想、臨床治療有効な症例など、その真髄を追求している。日本動脈硬化学会の新高脂血症診療ガイドラインにより、漢方薬の生薬および処方せんの中には脂質代謝改善作用、動脈硬化抑制作用、利胆作用のあるものを調べ、漢方薬の処方(経験方を含む)を実験的に検討し、同時にLDL-C値降下への影響及び脂肪酸などの血液脂質成分の変動も調べた。生活習慣病に役に立つより良い漢方の処方発見を目指している。

18

教授 河内 明夫

これまでめまい・平衡障害の発現機構およびGABAやグルタミン酸受容体の関与やその治療薬の探索を進めてきた。近年は、医薬品適正使用支援のための二次元コードお薬手帳鑑査システムの開発に加え、保険薬局薬剤師業務に関する薬学教育やその学習意識構造の解析、一般生活者に対する啓発教育など臨床薬学・社会薬学に関する研究を進めている。研究方法として、ソフトウェアSPSS・AMOSを用いた共分散構造分析など統計学的解析手法を用いている。

19

教授 下堂 蘭 権 洋

今、医療の場では医薬品を安全に、かつ適正に使用することが求められている。現在国内で使用される医療用医薬品約2万品目の情報を管理しつつ、医薬品の使用実態を明らかにすることは、医療や保険制度の抱える課題を解決する糸口となる。現在は、地方大学病院を対象にして、注射剤も含めたすべての医薬品の実投与データから入院時の持参薬や後発医薬品等の使用状況を把握し、その問題提起を行っている。同時に学会での活動を通じ、医薬品や医療情報に関わるシステム化や標準化などにも取り組んでいる。今後はさらに、地域への貢献として、地域住民を対象にして医薬品の多剤投与や高齢者への投与状況についてアプローチすることを目指している。

20

教授 徳 永 仁

これまで医薬品の適正使用を目指した最適治療法と薬学的評価法に関する研究を進めてきた。具体的には、副作用の軽減を目指した薬物投与設計に関する研究、副作用を誘発する薬物の体内動態に関する研究及び薬学的評価に関する統計解析などである。方法としては、HPLC、原子吸光度計、培養細胞によるトランスポート実験、MTT試験を用いている。

21

准教授 鳥取部 直子

これまで生活習慣病モデルラットにおける交感神経調節機構、また循環器系疾患モデル動物を使用した健康食品の安全性および副作用についての研究を進めてきた。近年は、心臓バイパス手術におけるヒトバイパス血管のセロトニン誘発れん縮を増強するリスクファクターの解明を進めている。研究方法として、血管収縮反応測定のためのマグヌス法、組織免疫染色、ウエスタンブロット、ノザンブロット、PCRなど分子生物学手法を用いている。

22

准教授 蒲生 修治

これまで中枢機能、特に空間認知学習の形成に関わる因子の解明を行ってきた。近年は、培養神経細胞および神経幹細胞などを用いて、神経細胞の機能的成熟や分化調節機構などの研究を進めているほか、インスリンが血管や血小板の反応性に及ぼす影響についても研究を進めている。研究方法としては、学習行動を評価するための迷路行動実験、免疫化学染色、ウエスタンブロット、RT-PCRなどの手法を用い、動物個体から分子まで多角的なアプローチを行っている。

23

准教授 大塚 功

細胞表面に存在する糖鎖は細胞間情報伝達機構に深く関与しており、これら糖鎖の機能を化学的及び物理的見地からの解明を目指している。これまでに疑似細胞膜上における糖鎖を原子間力顕微鏡で観察することで、その物理的挙動を明らかにした。また、糖鎖認識機構を明らかにするための分子ツールを化学合成により開発し、レクチンとの相互作用解明を目指している。さらに天然由来糖脂質を化学合成することで、新たな糖鎖機能の解明や創薬に繋がる研究を行っている。

24

准教授 中 良弘

医薬品情報は医薬品の開発、製造、使用のあらゆる過程において存在しており、その量は膨大なものとなる。薬剤師が医薬品情報による薬物療法支援を行うためには、その膨大な量の情報の中から情報を必要とする人の目的に合わせて検索、収集、評価、選択、加工といった情報処理を行う必要があり、その情報処理を効率良く正確に行うことが求められている。特別研究では膨大な量の医薬品情報から必要な情報を効率的に抽出するための手法(ニューラルネットワーク、統計解析など)を検討し、実例と照らし合わせながら、薬物療法支援に適したデータ抽出法の研究を行う。

志願票記入例

入試区分:受験する入試区分のコード番号
を下表により記入して下さい。

入試区分	コード
I 期	31
II 期	32
III 期	33

志望研究科・課程:志望する研究科・課程のコード番号を
下表により記入して下さい。

研究科・課程	コード
医療薬学研究科 博士課程	31

受験票宛先:

- (1)受験票が確実に届くように、郵便番号、住所、氏名を正確に記入して下さい。
- (2)返信用切手332円分を必ず貼って下さい。

入学検定料金額

- (1)受験する入試区分の入学検定料をよく確認して下さい。
- (2)上記の金額を「受付票(D)」「振込依頼票(E)」「振込金受取書(F)」の所定欄に記入して下さい。
- (3)記入金額を誤った場合は、銀行備え付けの振込用紙に書き替え、願書①②の取扱銀行収納印を押してもらって下さい。
※ご不明な点がございましたら、入試広報室まで必ずお問い合わせ下さい。

速達郵便はがき
882-8508

(住所) 宮崎県延岡市
吉野町1714-1

切手貼付

受験票(C)

(氏名) 九州太郎 様

医療薬学 研究科 医療薬学 専攻
博士 課程

受験番号

入試区分 **I 期** 入試

受験地 延岡

受付票(D)

九州太郎

〒882-8508
宮崎県延岡市
吉野町1714-1

〒0982-23-5544

延岡

30000

1

取扱銀行用 振込依頼票(E)

(九州保健福祉大学 入学検定料)

依頼日 2018年8月31日 振込予定 電信 科目 入学検定料

振込銀行 1 宮崎銀行 通町支店 普通 1988593
2 延岡信用金庫 本店 普通 1111003

金額 ¥ 30000

内訳

手数料

学校コード 入試コード 志願コード 受験地コード
7 31 31 18

依頼者 (フリガナ) キュウシュウ タロウ

氏名(漢字等) 九州太郎

〒882-8508
住所 宮崎県延岡市吉野町1714-1
電話(0982) 23-5544

3

振込金受取書(F)

学校コード 入試コード 志願コード 受験地コード
7 31 31 18

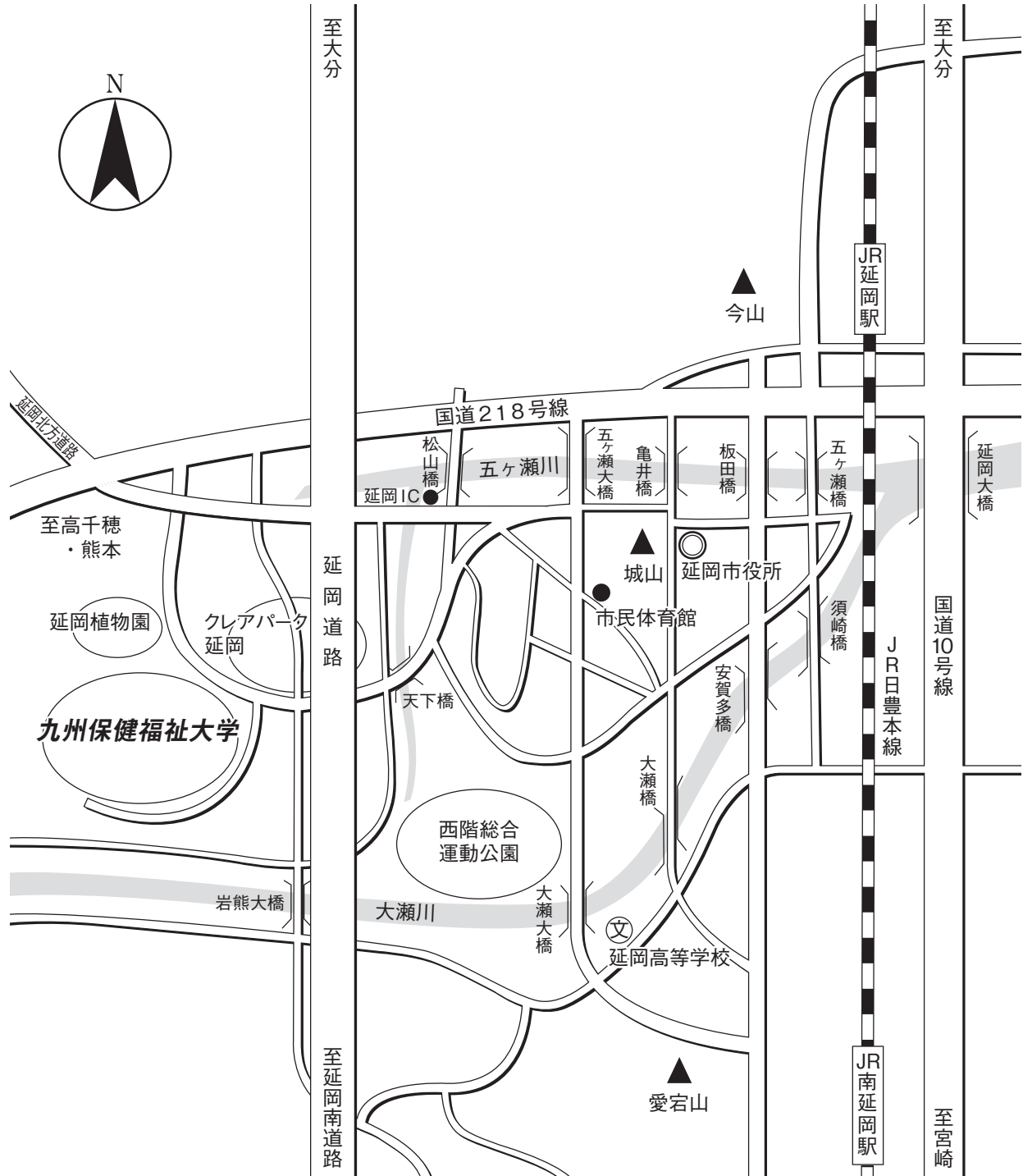
依頼者 (フリガナ) キュウシュウ タロウ

氏名(漢字等) 九州太郎

取入紙 2

銀行収納印があるか必ず確認して下さい。

九州保健福祉大学案内図



- | | | |
|---------------------|---------|---------------|
| ●九州保健福祉大学
(路線バス) | - JR延岡駅 | 約25分 (7.1 km) |
| | - 延岡市役所 | 約20分 (5.6 km) |



九州保健福祉大学

<http://www.phoenix.ac.jp>